

家庭科の学習内容に関する必要意識と実践に関する調査（1）

Survey on Necessary Awareness and Practice of Home Economics Learning Content (1)

岩田奈々・夫馬佳代子・

nana iwata・kayoko fuma

要旨

本報告は、小中学校で習得した家庭科に関する知識や技術が、実生活でどの程度実践しているか、必要と感じているかについて実態と意識に関する継続的調査の今年度における調査結果をまとめたものである。

家庭科は生涯にわたり学ぶ教科という特徴を持つが、生活環境の影響や衣生活の技術など、男女差が実践と意識に見られる実態を明らかにした。

キーワード：家庭科の実践・家庭科の必要意識・家庭科の意識調査

1. はじめに

家庭科は、家庭生活の創造に関して生涯にわたり学ぶ教科¹⁾という特徴を持ち、生活の中での実践の追跡調査は、家庭科で習得した内容の定着度を捉える上でも、また家庭の履修内容を見直す上でも必要であると考えられる。

本報告は、小中学校で習得した家庭科に関する知識や技術が、実生活でどの程度実践しているか、必要と感じているかについての実態と意識に関する継続的調査³⁾の今年度の結果を報告したものである。本年度調査から生活環境の影響や男女差が実践と意識に見られる生活実態や生活意識の実態について報告する。

2・研究方法および分析方法

1) 研究方法

研究方法は留置法のアンケート調査を2020年度に実施した。

2) 調査対象者

調査対象者は大学生160名（教育学部）を対象とした。回答者の属性は、性別は男子56名、女子104名、生活形態は下宿者58名、自宅者102名である。

3) アンケート調査項目

表1 調査項目

視点	軸	具体的な視点	分類 10項目
客観的	知識	科学的	①科学的知識
		合理的	②合理的知識
		情報獲得	③情報活用能力
	技術 (技能+知識)	技能を用いた	④技能レベル1
		実践力	⑤技能レベル2
内面的	交流	家族・地域と交流	⑥家族・友人・地域交流
	探索	探索行動	⑦試行錯誤・応用能力
	創造	創意工夫	⑧生活を創る能力
	ゆとり・いやし	ゆとり・いやし	⑨生活の中でのゆとり・癒し
	感覚	人間らしい五感	⑩快適さの追究

アンケート調査項目は、日常生活の中での実践と必要意識について衣食住の3つの生活場面をもとに、各内容について10項目の質問を設定した。（表1参照）

質問項目は、2004年からの継続的な推移の分析を最終的な目的とする為、2004年調査時と同様の質問項目を用いる。

質問項目は、以下の2つの視点で構成される。

- ①『客観的項目』（〈知識〉や〈技術〉のように、身に付いた力が客観的視点から捉えられる力）。
 - ②『内面的項目』（〈交流〉〈探索〉〈創造〉〈ゆとり・いやし・感覚〉のように面的視点から捉えられる力）。
- こうした各質問項目に対し、以下に示す「実践レベル」「必要意識レベル」について回答する形式である。
- ①「実践レベル」＝自分が現在生活の中で「実践している」あるいは「できると思う」レベル
 - ②「必要意識レベル」＝今後生活していく上で、どの程度「必要なことだと思うか」レベル

上記の「実践レベル」と「必要意識レベル」の比較により、家庭科の学習内容に関し必要とする意識があるものの実践が伴わない等、実践と必要意識の差異を明らかにし、家庭科の履修内容についての検討及び今後必要な内容を探ることを目的とする。ここで示した客観的視点5項目、内面的視点5項目は、各年代の指導要領にも継続的に記載される内容であり、家庭科の基本的な指導内容と捉えている。

4) 分析方法

分析は、①アンケートの単純集計、②項目別平均点表の作成、③レーダーチャートによる分析、④平均点散布図をもとにグループ化、⑤「実践」と「必要意識」の内訳を比較する等の手順を用いる。

なお、質問項目は4段階の加点形式とし、「実践レベル」「必要意識レベル」共通して、①4点「よくする（とても必要だと思う）」②3点「少しする（少し必要だと思う）」③2点「あまりしない（あまり必要だと思わない）」④1点「全くしない（全く必要ない）」と設定した。

3・結果及び考察

(1) アンケート調査結果

表2 アンケート調査結果の平均点から見た全体の傾向

視点	軸	具体的な視点	分類 10項目	実践レベル				必要意識レベル				
				食	住	衣	平均	食	住	衣	平均	
客観的	知識	科学的	①科学的知識	2.7	2.8	2.5	2.7	3.7	3.5	3.4	3.5	
		合理的	②合理的知識	2.6	2.9	2.6	2.7	3.6	3.7	3.6	3.6	
		情報獲得	③情報活用能力	2.5	2.1	2.7	2.4	3.3	3.1	2.9	3.1	
		技術 (技能+知識)	技能を用いた	④技能レベル1	3.3	2.9	2.8	3	3.7	3.7	3.5	3.6
		実践力	⑤技能レベル2	2.6	2.6	1.9	2.4	3.4	3.7	2.7	3.3	
客観的な5つの項目の平均				2.7	2.7	2.5	2.6	3.5	3.5	3.2	3.4	
内面的	交流	家族・地域と交流	⑥家族・友人・地域交流	3.2	2.5	3.2	3	3.7	3.3	3.7	3.6	
		探索	⑦試行錯誤・応用能力	1.9	2.5	3.1	2.5	3	3.4	3.4	3.3	
		創造	⑧生活を創る能力	2.2	2.8	1.8	2.3	3.3	3.4	2.7	3.1	
		ゆとり・いやし	⑨生活の中でのゆとり・癒し	3.1	3	3.4	3.2	3.4	3.6	3.4	3.5	
		感覚	⑩快適さの追究	3.2	3.2	3.4	3.3	3.5	3.7	3.5	3.6	
内面的な5つの項目の平均				2.7	2.8	3	2.8	3.4	3.5	3.3	3.4	

表2は、アンケートの回答を1～4点に点数化し平均点を算出した平均点表の分析の基準を示したものである。ここでは、「2～3点未満＝平均点な点数」と位置づけ、それより点数の低い「1～2点未満＝点数が低い」、「3～3.5点未満＝点数が高い」、「3.5～4点＝点数が極めて高い」と捉える。

1) 全体的な実践レベルの傾向

表2より「実践レベル」は『客観的項目（平均2.6点）』と『内面的項目（平均2.8点）』を比較すると後者の平均点が高い。このことから生活では〈知識〉や〈技能〉に関する実践よりも、生活を追求する〈探索〉や社会で生きるのに必要な〈交流〉、ゆったりと五感を感じながら生きる〈ゆとり・いやし・感覚〉など内面的な感情の面で快適な生活を送ろうとしていることが推測できる。

2) 全体的な必要意識レベルの傾向

表2より「必要意識レベル」では、『客観的項目（平均3.4点）』、『内面的項目（平均3.4点）』共に平均点は同一である。「実践レベル」では『客観的項目』の平均点が『内面的項目』の平均点よりやや低いが、「必要意識レベル」は同じであることから、〈知識〉や〈技能〉も日常生活を営む上で大切だという意識が

あることが分かる。一方で〈知識〉〈技能〉の『客観的項目』は、必要だと認識しても実践できていない。

3) 分類別 (10 項目) 実践レベルの傾向

表2に示す分類別「実践レベル」の傾向として、『客観的項目』の中では【技能レベル1】の平均点が比較的高い。一方で【技能レベル2】は全体的に低く、特に衣生活の【技能レベル2】の平均点は2点下回る。このことから簡単な技能は実践しているが、少し難しい技能に関しては実践していないことが分かる。

『内面的項目』では、【家族・地域との交流】や【ゆとり・いやし】、【人間らしい五感】の項目の平均点は高いが、【探索行動】と【創意工夫】の項目の平均点は低く、『客観的項目』の平均点よりも低い傾向がみられる。自分で考え、その考えに基づいて生活を豊かにしようとする行動する姿勢が低いことがうかがえる。

4) 分類別 (10 項目) 必要意識レベルの傾向

表2に示す分類別「必要意識レベル」の傾向として、『客観的項目』、『内面的項目』ともにどの項目も全体的に高く、「実践レベル」の平均点が3～3.5点未満の項目は「必要意識レベル」の平均点も高く3.5～4点未満である。このことから生活の中では家庭科で学ぶ内容の必要性は感じられていることが推測できる

(2) 性別による比較

表3 性別による比較

視点	軸	具体的視点	分類 10項目	性別	実践レベル				必要意識レベル				
					食	住	衣	平均	食	住	衣	平均	
客観的	知識	科学的	①科学的知識	男女	2.7	2.8	2.4	2.6	3.7	3.5	3.4	3.5	
		合理的	②合理的知識	男女	2.8	2.9	2.6	2.8	3.8	3.6	3.5	3.6	
		情報獲得	③情報活用能力	男女	2.5	2.7	2.4	2.5	3.8	3.5	3.5	3.6	
	技術 (技能+知識)	技能を用いた実践力	④技能レベル1	男女	2.8	3	2.6	2.8	3.7	3.7	3.7	3.7	
			⑤技能レベル2	男女	2.5	2.1	2.3	2.3	3.4	3.1	2.8	3.1	
		客観的な5つの項目の平均	④技能レベル1	男女	2.7	2.2	2.9	2.6	3.4	3.2	3	3.2	
			⑤技能レベル2	男女	2.9	2.8	2.2	2.6	3.6	3.7	3.1	3.5	
	内面的	交流	家族・地域と交流	⑥家族・友人地域交流	男女	3.6	3	3.1	3.2	3.8	3.8	3.7	3.8
			探索	探索行動	⑦試行錯誤応用能力	男女	2.1	2.5	1.6	2.1	3.2	3.7	2.5
		創造	創意工夫	⑧生活を創る能力	男女	2.9	2.6	2	2.5	3.8	3.7	2.9	3.4
⑨生活の中でのゆとり・癒し				男女	2.5	2.6	2.2	2.4	3.5	3.5	3.1	3.4	
ゆとり・癒し		ゆとり・癒し	⑨生活の中でのゆとり・癒し	男女	3	2.9	3.3	3.1	3.4	3.5	3.3	3.4	
			⑩快適さの追究	男女	3.2	3	3.5	3.2	3.5	3.7	3.5	3.6	
感覚		人間らしい五感	⑩快適さの追究	男女	3.2	3.2	3.2	3.2	3.5	3.7	3.5	3.5	
			⑩快適さの追究	男女	3.2	3.3	3.5	3.3	3.5	3.8	3.6	3.6	
内面的な5つの項目の平均		内面的な5つの項目の平均	⑩快適さの追究	男女	2.6	2.8	2.8	2.7	3.4	3.4	3.2	3.3	
			⑩快適さの追究	男女	2.8	2.8	3.1	2.9	3.5	3.5	3.4	3.6	

表3は、男女別に平均点を算出して平均点表を作成したものである。ここでは、男女で比較して0.3点以上差がある項目は男女差が大きいと捉えた。男子—女子 ≥ 0.3 (男子の方が高い)、差が0.3点未満 (男女差はあまりない)、女子—男子 ≥ 0.3 (女子の方が高い) と捉える。表3から、男子の方が0.3点以上高い項目がなく、全体的に女子の方が「実践レベル」・「必要意識レベル」ともに高いことが分かる。

(3) 生活形態による比較

表4は、生活形態別に平均点を算出して平均点表を作成したものである。下宿—自宅 ≥ 0.3 (下宿の方が高い)、差が0.3点未満 (男女差はあまりない)、自宅—下宿 ≥ 0.3 (自宅の方が高い) の3分類で捉えた。

表4から、自宅者の方が0.3点以上高い項目がなく全体的に下宿者の方が「実践レベル」・「必要意識レベル」ともに高いことが分かる。「実践レベル」は『客観的項目 (下宿・自宅差0.2点)』、『内面的項目 (下宿・自宅差0.1点)』で、『客観的項目』の方が下宿・自宅差が見られる。『内面的項目』は自宅者も意識しており実践できているが、外面に表出する『客観的項目』は自分で家事をこなさなければならない下宿者の方がやはり実践している実態にあることが分かる。「必要意識レベル」は『客観的項目 (下宿・自宅差0点)』、

表4. 生活形態による比較

視点	軸	具体的視点	分類 10項目		実践レベル				必要意識レベル				
					食	住	衣	平均	食	住	衣	平均	
客観的	知識	科学的	①科学的知識	下宿	2.8	3	2.6	2.8	3.9	3.6	3.5	3.7	
		合理的	②合理的知識	自宅	2.7	2.7	2.5	2.6	3.7	3.5	3.5	3.6	
		情報獲得	③情報活用能力	下宿	2.9	3	2.7	2.9	3.7	3.7	3.6	3.7	
	技術 (技能+知識)	技能を用いた 実践力	④技能レベル1	下宿	2.6	2.8	2.5	2.6	3.7	3.6	3.7	3.7	
				自宅	2.5	2	2.7	2.4	3.3	3.1	3	3.1	
		⑤技能レベル2	下宿	3.5	3.1	2.8	3.1	3.7	3.8	3.5	3.7		
			自宅	3.3	2.8	2.8	3	3.7	3.7	3.5	3.6		
	客観的な5つの項目の平均				下宿	3	2.9	2.5	2.8	3.7	3.6	3.2	3.5
					自宅	2.7	2.5	2.5	2.6	3.6	3.5	3.3	3.5
	内面的	交流	家族・ 地域と交流	⑥家族・友人 地域交流	下宿	3.1	2.6	3.3	3	3.7	3.5	3.8	3.7
探索		探索行動	⑦試行錯誤 応用能力	自宅	3.3	2.4	3.1	2.9	3.7	3.2	3.7	3.5	
創造		創意工夫	⑧生活を創る能力	下宿	2	2.9	3.1	2.7	2.9	3.6	3.4	3.3	
				自宅	1.9	2.3	3.1	2.4	3.1	3.3	3.4	3.3	
ゆとり・癒し		ゆとり・癒し	⑨生活の中での ゆとり・癒し	下宿	2.2	3.2	1.8	2.4	3.5	3.4	2.6	3.2	
				自宅	2.3	2.6	1.9	2.3	3.4	3.4	2.7	3.2	
感覚		人間の五感	⑩快適さの追究	下宿	3.2	3.1	3.5	3.3	3.5	3.7	3.4	3.5	
				自宅	3.1	2.9	3.4	3.1	3.5	3.6	3.5	3.5	
内面的な5つの項目の平均				下宿	3.3	3.3	3.4	3.3	3.5	3.8	3.5	3.6	
				自宅	3.2	3.2	3.3	3.2	3.6	3.7	3.5	3.6	
				下宿	2.8	3	3	2.9	3.4	3.6	3.3	3.5	
				自宅	2.8	2.7	3	2.8	3.5	3.4	3.4	3.4	

『内面的項目（下宿・自宅差0.1点）』で生活形態による差は見られなかった。「実践レベル」では下宿・自宅差が見られたのに「必要意識レベル」では見られなかったことから、自宅の方が必要だと思っても実践できていないという傾向があることが明らかとなった。項目ごとで見ると、「実践レベル」では、『客観的項目』の【技能レベル2】で特に大きな差が見られた。食生活と住生活において下宿・自宅差があり、全体では0.4点の平均点の差がある。このことから、下宿の方が家事をする機会が多いこともあり、簡単な技能だけでなく少し難しい技能まで実践していることが分かる。

一方、『内面的項目』では、住生活の【探索行動】と【創意工夫】の項目で下宿・自宅差が表れたものの、全体では見られなかった。「必要意識レベル」では、「実践レベル」は、どの下宿・自宅差が表れていないことが読み取れる。特に衣生活はどの項目も平均点の差が0.1点または0点であった。

(4) 「実践レベル」と「必要意識レベル」の比較

1) 全体の傾向

① 「実践レベル」と「必要意識レベル」の比較

資料1は、衣食住全ての分野全体における10項目の平均点をレーダーチャート化したものである。

資料1の図1から、【科学的知識】や【合理的知識】、【技能レベル2】、【探索行動】、【創意工夫】の項目では差が大きい、【技能レベル1】や【家族・地域との交流】、【ゆとり・いやし】、【人間らしい五感】の項目では差が小さい傾向がみられる。「実践レベル」を見ると、『客観的項目』の【技能レベル1】、『内面的項目』の【家族・地域との交流】や【ゆとり・いやし】、【人間らしい五感】の項目については比較的高い。しかし、『客観的項目』の【技能レベル2】や『内面的項目』の【創意工夫】の項目では低く、少し難しい技能の実践や、自分で考え工夫する実践が少ない傾向がみられる。また、【技能レベル1】は「実践レベル」が高いが、【技能レベル2】となると「実践レベル」が下がることから、基礎的な技能と応用的な技能とでは同じ〈技能〉でも差がみられた。「必要意識レベル」に関しては、全体的にどの項目も必要であるという意識が見られるが、その中でも『客観的項目』の【情報獲得能力】や【技能レベル2】、『内面的項目』の【探索行動】や【創意工夫】は比較的「必要意識レベル」が低い。これらの項目は、「実践レベル」も比較的低く、「必要意識レベル」と「実践レベル」の相互の影響が考えられる。

② 性別・生活形態による「実践レベル」の比較

図1に示す実践における男女別図に着目すると、特に『客観的視点』で男女差が顕著に表れている。

資料1. 食・住・衣の実践と必要意識

		実践と必要	性別	実践の視点	必要意識の視点
全 体	生活実態	<p>全体の「実践」と「必要意識」</p> <p>図1 全 外：必要意識 内：実践</p>	性別	<p>実践の視点別平均点 (男女別)</p>	<p>必要意識の視点別平均点 (男女別)</p>
				<p>実践の視点別平均点 (生活形態別)</p>	<p>必要意識の視点別平均点 (生活形態別)</p>
食 生 活	生活実態	<p>食生活の「実践」と「必要意識」</p> <p>図2 食 外：必要意識 内：実践</p>	性別	<p>実践の視点別平均点 (男女別)</p>	<p>必要意識の視点別平均点 (男女別)</p>
				<p>実践の視点別平均点 (生活形態別)</p>	<p>必要意識の視点別平均点 (生活形態別)</p>
住 生 活	生活実態	<p>住生活の「実践」と「必要意識」</p> <p>図3 住 外：必要意識 内：実践</p>	性別	<p>実践の視点別平均点 (男女別)</p>	<p>必要意識の視点別平均点 (男女別)</p>
				<p>実践の視点別平均点 (生活形態別)</p>	<p>必要意識の視点別平均点 (生活形態別)</p>
衣 生 活	生活実態	<p>衣生活の「実践」と「必要意識」</p> <p>図4 衣 外：必要意識 内：実践</p>	性別	<p>実践の視点別平均点 (男女別)</p>	<p>必要意識の視点別平均点 (男女別)</p>
				<p>実践の視点別平均点 (生活形態別)</p>	<p>必要意識の視点別平均点 (生活形態別)</p>

(※資料1 実践・必要意識の視点の図 性別：太線・男子 細線・女子 生活実態：太線・下宿 細線・自宅)
 【技能レベル1】と【技能レベル2】において、女子の方が「実践レベル」が高くなっていることが分かる。
 生活形態別の図では下宿と自宅で大きな差が見られた。特に『客観的項目』の【合理的知識】と【技能レベル2】では下宿している大学生の方が実践し、合理的な知識を身に付けながら自分で家事をこなす下宿者の実践態度がうかがえる。(資料1「実践レベル」の項目別平均点 上：男女別 下：生活形態別)

また、『内面的項目』の【創意工夫】と【ゆとり・いやし】などの項目によっても「実践レベル」に差が見られた。(資料1「必要意識レベル」の項目別平均点 上：男女別 下：生活形態別)

③性別・生活形態による「必要意識レベル」の比較

図1に示す必要意識について男女別に比較すると、明確な男女差は見られず、男女共に家庭科で学んだ内容は日常生活に生かす必要があると考えていることが分かる。特に、『客観的項目』の【技能レベル1】の平均点が高く、基礎的な技能は重要だと思っていることが分かる。生活形態別の図では、下宿と自宅で「必要意識レベル」に差は見られなかった。

2) 食生活の傾向

①「実践レベル」と「必要意識レベル」の比較

資料1の図2は「食生活」は食生活に関する10項目の質問項目の平均点を示したものである。この図から、全体的に「実践レベル」は項目間の差が大きく、『客観的項目』では〈知識〉の【科学的知識】や【合理的知識】、『内面的知識』では【探索行動】や【創意工夫】において差が表れた。一方、『客観的知識』では【技能レベル1】、『内面的項目』では【家族・地域との交流】や【ゆとり・いやし】、【人間らしい五感】の項目が「実践レベル」と「必要意識レベル」との差が小さく、必要だと感じ実践にも取り組んでいる。「実践レベル」のみで見ると、衣食住全体のグラフよりも差が顕著に表れており、例えば『客観的項目』の【技能レベル1】や、『内面的項目』の【家族・地域との交流】等は「実践レベル」が高い傾向が見られる。

②性別・生活形態による「実践レベル」の比較

図2における「実践レベル」を抽出し「男女別」、「生活形態別(下宿・自宅別)」に示す。男女別図から、男女間で特に差がみられる項目は『客観的項目』の〈技能〉の【技能レベル1】と【技能レベル2】である。男女平等が浸透しつつも、まだ男子における〈技能〉の「実践レベル」は他の項目並の平均点であるのに対し、女子は他の項目よりも〈技能〉が高い結果となった。また、『内面的項目』の【探索行動】と【創意工夫】の項目では男女共に「実践レベル」が低く、料理を工夫する実践は低いことが推測できる。

③性別・生活形態による「必要意識レベル」の比較

図2に示す「必要意識レベル」を抽出し、「男女別」、「生活形態別(下宿・自宅別)」に図で示す。男女別の図からも生活形態別の図からも「必要意識レベル」が全体的に高いことが分かる。若干の男女差、下宿・自宅差はあり、『客観的項目』の【技能レベル1】と『内面的項目』の【創意工夫】は性別の影響を受けていると捉えることができる。『客観的項目』の【科学的知識】や【情報獲得能力】は、生活形態の影響を受けていると捉えることができる。ほとんどの項目の「必要意識レベル」が高い中、『内面的項目』の【探索行動】の「必要意識レベル」が低く、食事のメニューや食生活を工夫する必要意識が低いことがうかがえる。全体的に性別や生活形態に関係なく『客観的項目』、『内面的項目』共に生活の中で必要だと感じていることが明らかになった。(食生活「実践レベル」の項目別平均点 上：男女別 下：生活形態別)(食生活「必要意識レベル」の項目別平均点 上：男女別 下：生活形態別)

3) 住生活の傾向

①「実践レベル」と「必要意識レベル」の比較

資料1図3は住生活における10項目の質問項目の平均点を示したものである。この図から、全体的に「実践レベル」、「必要意識レベル」ともにどの項目も全田局的に実践し、必要意識も高いことが分かる。しかし『客観的項目』の【情報獲得能力】が「実践レベル」も「必要意識レベル」も低い。「必要意識レベル」に関し、『客観的項目』〈技能〉の【技能レベル1】と【技能レベル2】の「必要意識レベル」が高いことが分かる。

②性別・生活形態による「実践レベル」の比較

図3に示す住生活の「実践レベル」を抽出し、「男女別」、「生活形態別(下宿・自宅別)」の図を示した。男女別の図から、男女間での差は明確ではないが、女子の方が「実践レベル」が高くなっていることが分かる。『客観的項目』の【情報獲得能力】や【技能レベル2】、『内面的項目』の【家族・地域との交流】や【探

索行動】は「実践レベル」が比較的 low に実践できていない。生活形態別の図から、下宿・自宅差がみられる。特に『客観的項目』の【技能レベル2】や、『内面的項目』の【探索行動】、【創意工夫】においては、下宿・自宅の差が大きく、下宿のほうが「実践レベル」が高い。下宿の場合、トイレや風呂まで自分で掃除・管理するため【技能レベル2】の「実践レベル」が高くなっていることが推測できる

③性別・生活形態による「必要意識レベル」の比較

図3に示す「必要意識レベル」を抽出し、「男女別」、「生活形態別（下宿・自宅別）」に図で示す。生活形態別の図からは、男女差、下宿・自宅差は明確にみられず、『客観的項目』、『内面的項目』ともに生活していく中で必要だと感じていることが明らかになった。「実践レベル」においては、下宿・自宅差が見られたことから、自宅の場合は『客観的項目』の【技能レベル2】や、『内面的項目』の【探索行動】、【創意工夫】に関して必要だと思っても実践できていない現状が推測できる。（住生活「実践レベル」「必要意識レベル」の項目別平均点（上：男女別 下：生活形態別）

4) 衣生活の傾向

①「実践レベル」と「必要意識レベル」の比較

図4は、衣生活における10項目の質問項目の平均点を示したものである。全体的に「実践レベル」と「必要意識レベル」の項目間で差があり、項目により傾向が異なることが分かる。『客観的項目』の【情報獲得能力】や『内面的項目』の【家族・地域との交流】や【探索行動】、【ゆとり・いやし】、【人間らしい五感】の項目は「実践レベル」と「必要意識レベル」に差があまり見られない。また、項目間においても「実践レベル」、「必要意識レベル」に差がある。

例えば「実践レベル」では、『客観的項目』の【技能レベル2】と、『内面的項目』の【創意工夫】の「実践レベル」が低く、逆に『内面的項目』の【ゆとり・いやし】と【人間らしい五感】は特に高くなっている。衣生活に関しては、自分で衣服を製作する体験は少なく、既製の購入が影響していると思われる。

②性別・生活形態による「実践レベル」の比較

図4に示す「実践レベル」だけ抽出し、「男女別」、「生活形態別（下宿・自宅別）」に図で示す。

男女別の図から、『客観的項目』の【情報獲得能力】と【技能レベル1】に比較的大きな差が表れたが、他の項目においてはあまり男女差が表れなかった。【情報獲得能力】に関しては、流行のファッションやコーディネートの情報収集に関して質問したため、ファッションへの関心が女子の方が高いことが推測できる。【技能レベル1】に関しては基本的な衣服の手入れの質問項目であり共に女子の方が高い結果となった。生活形態別の図では生活形態による差は見られなかったが、『客観的項目』の【技能レベル2】と『内面的項目』の【創意工夫】は「実践レベル」が低く、『内面的項目』の【ゆとり・いやし】と【人間らしい五感】は高くなった。全体的に男女差は見られるが下宿・自宅差は見られなかったことから、衣生活においては性別による影響が大きいことが分かる。

③性別・生活形態による「必要意識レベル」の比較

図4で示す「必要意識レベル」を抽出し、「男女別」、「生活形態別（下宿・自宅別）」に図で示す。

男女別の図から、『客観的項目』の【情報獲得能力】と『内面的項目』の【創意工夫】は「実践レベル」では他の項目より平均点が低い、「必要意識レベル」は「実践レベル」に比べると他の項目と差は見られない。全体的に女子の方が「必要意識レベル」が高く、特に『客観的項目』の【技能レベル1】と『内面的項目』の【家族・地域との交流】は高くなっている。また、生活形態別の図から、下宿・自宅差がどの項目も衣生活において生活形態の影響は受けていないことが分かる。（衣生活「実践レベル」「必要意識レベル」の項目別平均点 上：男女別 下：生活形態別）

(5) 「グループ別平均点」の比較

資料2は、4つのグループ（男女別に下宿と自宅に分類）別の平均点を算出して散布図として示したものである。この散布図からどのグループの「実践レベル」、「必要意識レベル」が高く見られるか、その差の大きさを分析し、性別や生活形態による影響について検討する。

1) 食生活の傾向

資料2「食生活」では、食生活の回答をグループ別に平均点を算出し、4グループの視点別平均点を散布図に示したものである。縦軸は平均点、横軸は項目番号を示している。

①「実践レベル」の分析

資料2「食生活」の「実践レベル」から、項目によってグループによる点数のばらつきが大きく見られ、性別や生活形態の与える影響は大きいことが明らかになった。【合理的知識】や【技能レベル1】、【技能レベル2】の3つの項目から、3グループ（女・下宿）が最も高く、2グループ（男・自宅）が最も平均点の低い結果となった。このことから、「男子よりも女子の方が実践している」傾向と、「自宅者よりも下宿者の方が実践している」傾向が明らかになった。また、【技能レベル1】と【技能レベル2】のばらつきが特に大きく、食生活の〈技能〉に関しては性別と生活形態の影響が大きいことが分かった。

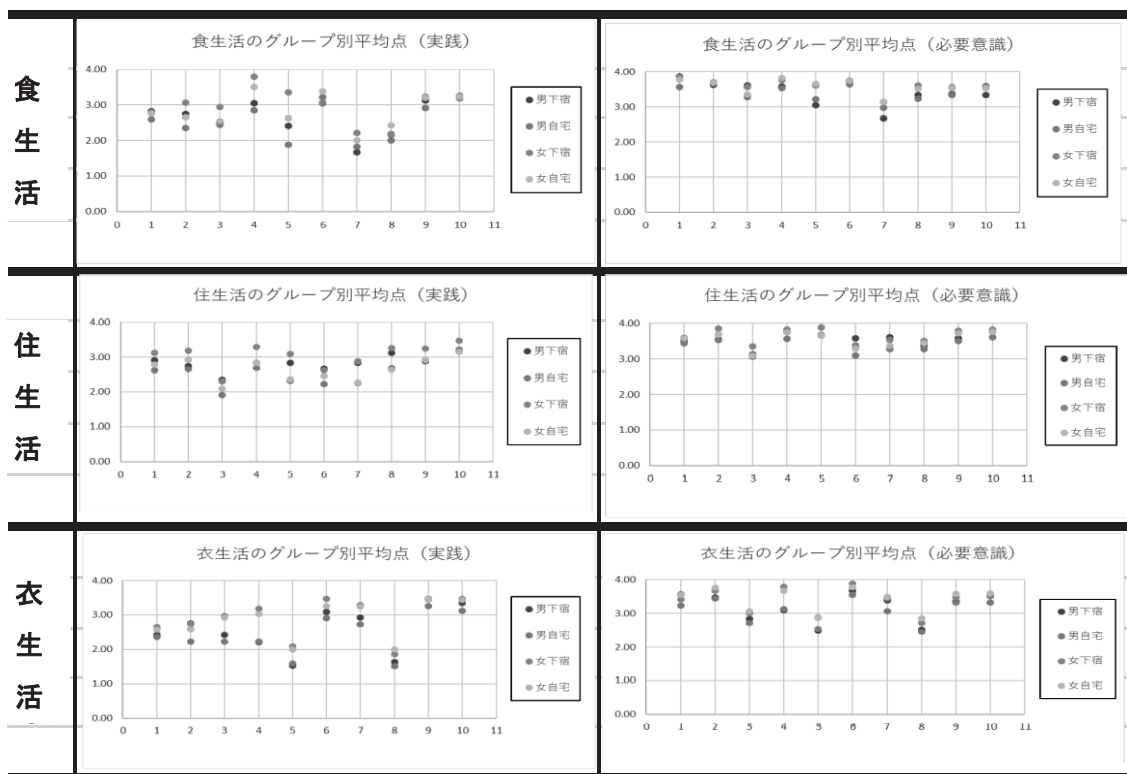
【技能レベル1】では1グループ（男・下宿）と2グループ（男・自宅）、3グループ（女・下宿）と4グループ（女・自宅）の差は小さく、生活形態よりも性別による影響が大きいことが分かる。

②「必要意識レベル」の分析

資料2「食生活」の「必要意識レベル」の図から、各グループの差は「実践レベル」と比べて比較的小さく、性別や生活形態関係なくどの人も10項目全てにおいて「必要である」と感じていることが分かる。

資料2. グループ別の比較

「実践」の視点（男：下宿・自宅 女：下宿・自宅） 「必要意識」の視点（男：下宿・自宅 女：下宿・自宅）



一方で、【探索行動】の項目は他の項目に比べ比較的平均点が低く、自分でアレンジして調理する必要があるという意識はあまり高くないことが分かる。

2) 住生活の傾向

①「実践レベル」の分析

資料2「住生活」の「実践レベル」を示す図から、全体的に3グループ（女・下宿）が最も高く、2グループ（男・自宅）及び4グループ（女・自宅）が最も低い。このことから、食生活同様、「男子よりも女子の方が実践している」傾向と、「自宅者よりも下宿者の方が実践している」傾向が明らかになった。

② 必要意識レベル」の分析

資料2「住生活」の「必要意識レベル」の図から、各グループの差は「実践レベル」程明確に見られず、性別や生活形態関係なくどの人も10項目全てにおいて「必要である」と感じていることが分かる。しかし【情報獲得能力】は「必要意識レベル」においても平均点が他の項目よりも低く、「実践レベル」の平均点の低さに比例していると思われる。また、【家族・地域との交流】の項目も比較的低くなっており、グループによるばらつきも大きく見られる。

3) 衣生活の傾向

① 実践レベル」の分析

資料2「衣生活」の「実践レベル」の図から、全体的にグループによるばらつきが大きく見られ、性別や生活形態が与える影響が大きいことが明らかになった。どの項目においても2グループ(男・自宅)の平均点の低さが目立ち、3グループ(女・下宿)と4グループ(女・自宅)の平均点の高さが目立つ。このことから、「男子よりも女子の方が実践している」傾向と、「自宅者よりも下宿者の方が実践している」傾向が明らかである。

② 必要意識レベル」の分析

資料2「衣生活」の「必要意識レベル」の図から、項目によりグループによる差があるものとそうでないものがあることが分かる。「実践レベル」の分析で述べた、【技能レベル1】の項目では、「必要意識レベル」でも男女による差があり、男子の「必要意識レベル」が女子よりも低くなっている。必要意識が低いと、実践もあまりできていないことがうかがえる。

本調査の結果から、衣生活に関しては、実態と必要意識ともに、食生活や住生活に比較して項目の差が大きく見られ、特に技能レベル2に関しては、日常生活における実践への取り組みは低いことが明らかになり、必要意識に関しても他項目と比較して低いことが明らかとなった。

こうした結果をもとに、今後はさらに衣生活に関する習得内容が抱える課題について検討を試みる。

4. まとめ 一家庭科の学習内容に関する必要意識と実践に関する調査結果もとにした提案一

本報告では、大学生を対象に、家庭科の特徴でもある実生活の中での家庭科の活用実態と家庭科が生活の中でどの程度必要と感じているのか必要意識を探った。本調査は継続的に2004年から実施しているが、本報告では2020年度の調査結果の特徴を明らかにした。

本調査の質問項目は、生活の中での衣食住の実践に着目し、各項目とも1科学的知識・2合理的知識・3情報獲得能力・4技能レベル・5技能レベル・6交流・7探索行動・8創意工夫・9ゆとり・いやし・10人間らしい五感の10項目について、4段階のレベルに分け実践や必用意識について回答した。1から5は客観的に判断できる内容とし、6から10は内面的な部分であり主観的に判断する内容を設定した。

平成16年に同様の質問項目で中学生を対象に調査した結果では、全ての領域において実践能力よりも必要意識が高い傾向が見られた。生徒は日常生活において家庭科で学んだ知識や技術の必要性は感じているが、それを実践する場と時間が無いことが明らかとなった。この傾向は男女ともに見られた。

一方で今年度の調査は、小中学校で家庭科を習得した大学生が、生活の中での実践と必要意識を探った調査であるが、家庭科の学習内容による差が明確にみられたことと、分野により実践や必用意識が大きく異なる結果が見出された。特にこの傾向は衣生活に関する内容で多くみられた。

また客観的項目と内面的な項目に関する調査結果でも異なる傾向がみられた。客観的項目は、衣食住に関する質問項目でも、各分野の質問項目に対する回答結果でも、情報に関する内容は実践も必要意識も高い傾向がみられたのに対し、技術・技能に関する内容では、実践が低い傾向がみられ、特に衣生活に関しては著しくこの傾向がみられた。内面的項目は、家庭科の特徴でもある人間らしい快適な生活の追求を評価した内容を設定したが、全体的に項目間の差が少なく、実践や必要にも共通した傾向がみられた。

調査結果の全体的な傾向から、客観的な学習内容に関する項目である1科学的知識・2合理的知識・3情

報獲得能力は、家庭科を学んだ後にも生活場面の中で生かせると感じる必要意識は高いことが明らかとなった。それに対し、基礎的な生活技能である4技能レベルは生活の中で必要と意識されて、実践にも取り組まれているものの、より応用した生活技能・5技能レベルにおいては、実生活の中では活用されていない傾向がみられた。

こうした結果は、中学生を対象とした調査結果と比較すると、学校教育において家庭科を学習する中学生の段階では、家庭科の学習内容は必要であると捉えているのに対し、大学生になると生活環境により必要意識が異なる傾向がみられ、特に自宅か下宿かの生活環境により、必要意識は異なることが明らかとなった。また実践に関しても、中学生の段階では、家庭科の学習内容は学校教育の場が主な実践の場であり、家庭生活の中では「実践する時間がない」とする傾向がみられたが、大学生の立場になると、実践への取り組みは生活環境や本人の意識が影響する傾向がみられた。このように学校教育で習得した家庭科は、実生活の中では、生活の中で生かせる内容であるのか、生活環境の中で必要とされているのかなど、多様な課題も見出された結果となった。

調査結果をふまえて、家庭科の学習内容についての以下の3点について今後検討を試みたいと考える。

①学習内容の生活への応用・発展

小学校及び中学校段階において一貫教育として家庭科に取り組んでいるが、家庭科で学んだ基礎的な知識や技術が社会の中でどのように活用することができるかを、発達段階において実践する必要がある。既に学校教育においては、家庭科は生活へのフィードバックが必要とされているが、こうした教育活動には時間的な制限もあり、取組が難しい現状もあると思われる。今後はさらにこうした活動への取り組み方法を検討する必要があると考える。

②基礎的技術をもとにした応用と創造

小学校から基礎技術について習得するが、基礎技術は今後どのように応用することができるのか、どのような創作が可能であるのか等について、授業においても今後の発展に触れる機会があることが望ましいと考える。学校教育においても基礎技術の応用について作品事例が教科書等に示されているが、さらに生涯を見通して、例えば「高齢者が家族にいる場合に、衣服を改良してボタンを大きく付替える」だけでも生活が改良できる体験をすると、今回の調査では衣生活への実践が著しく低い傾向がみられたが、生活改良の手段として活用できることを学ぶと、生活の中での実践や必用意識にも影響が見られると考える。

③実践活動の評価及び生活を改良する意識と実践

家庭科の授業の中で、日常生活での実践をより積極的に評価することで、家庭科の内容を生活における実践と結びつけて習得すると、児童・生徒が将来生活者となった場合、家庭科での習得内容の生かし方を習得することができ、将来への実践にもつながると考える。また家庭科は社会の動向や生活の変化に大きく影響を受ける教科ある。一方で家庭科の教科として不変な学習内容もある。家庭科では子供を取り巻く生活環境も反映させて教材研究が行われているが、現在の学習内容の習得意義に加えて、10年後の生活を見据えて現在の習得内容が実際の活用法の提案も必要であろう。

上記の3点を今後の課題として、授業実践を通して検討を試みていきたいと考えている。

【引用文献】

- 1) 文部科学省「中学校学習指導要領（平成29年告示）」東山書房、平成30年3月。
- 2) 夫馬佳代子・三浦莉笑・杉原利治「中学校の家庭科に関する実践能力と必要意識—客観的項目とあそびの観点の内的的項目を元にして—」岐阜大学教育学部研究紀報告（教育実践研究）第8巻、平成18年3月、115—126。

【参考文献】

- 1) 吉原崇恵編著『生活を科学し、実践する力を育てる授業づくり』開隆堂出版、平成22年4月。
- 2) 柳昌子、甲斐純子『家庭科教育の実践力』建帛社、平成12年。
- 3) 吉原崇恵『家庭科教材研究の発展』学術図書出版社、平成6年。
- 4) 柳昌子、中屋紀子『家庭科の授業をつくる』学術図書出版社、平成20年。